

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 27 日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02390

研究課題名（和文）自己に内在する公共性を喚起し、個人と公共性の矛盾を解消する道德教育の在り方

研究課題名（英文）Principles of Moral Education Which arouses Indwelling Publicness, and which solves Contradiction between Publicness and Individual

研究代表者

生越 達（Ogose, Toru）

茨城大学・教育学研究科・教授

研究者番号：80241735

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：人間存在において公共性が内在していることを生物学や脳研究、さらには政治哲学や精神医学の成果を援用しながら明らかにしてきた。人間は生物としての弱さをむしろ力として進化してきた動物であり、その際個人の力ではなく共同性を大切にすることで進化してきたことが明らかになった。だが実際現代社会においては、人間のもう一方の本質であると思われる自己中心性が強まってきていることも明らかにしてきた。

これらの研究からわかってきたことは、自己に内在する公共性を喚起するためには、共同性を維持するような場を作りだしていくことが必要で、このような場を触媒のようにして道德性を育てることが可能になる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人間存在に公共性が内在することを生物学や脳研究なども踏まえて明らかにしたことに第一の社会的意義があるように思われる。公共性については多様なとらえ方が可能であるが、広い視野から公共性を捉えることで人間の本質をコミュニケーションする動物としてとらえられることがわかり、道德性を考える際に共同性を維持することを大前提として考えなければならないことが明らかになった。

さらに中央教育審議会答申における居場所としての学校、個別最適な学びと協働的な学びの両立のために、学校において対話の場を形成することの重要性を石牟礼道子の思想やオープンダイアログにおける対話に学びながら明らかにした点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Based on the research of biology, and the study of brain, political philosophy, psychiatry, and so forth. I have made clear that public nature is immanent in human beings. Human beings have evolved by compensating for weakness and therefore have evolved by cherishing the cooperation. But in the modern society, we are apt to lay stress on self-realization.

In my study, I have explored that we need to preserve the places for dialogue in order to evoke publicness which is immanent in ourselves and that through experiencing dialogue we can nurse morality.

研究分野：教育方法

キーワード：道德 公共性 対話 弱さ オープン・ダイアログ 対等性 異質性 進化

1. 研究開始当初の背景

「特別な教科 道徳」がいじめ予防を目的にしている点を鑑み、どのような道徳教育がいじめを予防できるのかを検討する研究である。いじめ研究においては内藤に代表されるように、日本に特徴的な共同体のあり方である「中間集団全体主義」がいじめを生み出しているという主張があるが、本研究は、これまでの私の研究をとおして明らかになってきた子どもたちの他者への承認欲求（業績 1-11 15-20 22-34、あるいは土井等の主張）やハイデガー等の技術社会・情報消費社会の批判（業績 2 4 11 14 21 24 25、あるいはアダム・スミスやサンデル）が、内藤らの主張と矛盾しているように見える点から出発する。本研究は、むしろいじめ予防のためには、「共感的理解」、「分かち合い」、「平等」といったキーワードで語られる承認欲求を満たしてくれる共同体が必要であり、道徳性もまた、こうした関係性を基盤にしないと育まれないのではないかという仮説にたって研究を進めるものである。道徳性は、松下が指摘するように、自然の道徳、リベラリズム道徳、共同体道徳、ケアの倫理など様々な視点から捉えることができるが、「自然の道徳」の基礎なしには、その道徳性は「人間性に深く迫る道徳教育」になることはできないだろう。本研究においては、自然な道徳の本質が「共感的理解」、「分かち合い」、「平等」と深く関わるといふ仮説に立って研究をすすめる。もちろん、そうした仮説にたつことについても十分に検討したい。本研究においては、文献研究をとおして上記の問いをさらに明確にした上で、フィールドワークをとおして、その問いを確かめると同時に、可能であればいじめ予防に有効な道徳教育を具体的に提案したい。

2. 研究の目的

「特別の教科 道徳」において、教育再生会議第一次提言以降、繰り返し強調されているように「いじめの本質的な問題解決のために道徳教育を新たな枠組みによって教科化し、人間性に深く迫る教育を行う」ことが求められている。「単なる話し合いや読み物の登場人物の読み取りに偏ることなく道徳科の質的転換を図る」（道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議）が必要なのである。

一方、いじめ解決に関しては、二つの立場からの研究がある。ひとつは、内藤が指摘するように、学校の中間集団全体主義を批判し、学校を市民社会化することでいじめをなくそうとする立場である。もうひとつの方向は、土井などが指摘しているように、いじめの背景に、空気を読み合う子どもたちの存在があることを明らかにし、承認欲求を満たし、かつ異質な他者とのコミュニケーションの場を準備することでいじめを予防しようとする立場である。

本研究は、いじめに関しては土井に近い立場に立ちつつ、学校のなかに、社会の中で失われつつある共同性をつむぎ直すことが必要であると考え、研究を進める。しかし、求められているのは、内藤の言うような「排除する共同性」ではなく、「異質性を認め合う共同性」であるべきである。申請者のこれまでの研究は、現代社会が、こうした共同性を喪失し、そして子どもたちは、こうした共同性の喪失によって、孤立し、他者の承認を強く求めるようになってきていることを明らかにしてきた。本研究においては、その点を、松下のとらえる「自然の道徳」と関係付けながら、道徳教育の在り方として提案することである。

3. 研究の方法

研究方法としては、第一に、脳科学や哲学、心理学、哲学、社会学の力を借りながら、人間の道徳性の根源にある「自然の道徳」を明らかにし、この道徳が他の道徳的立場（リベリズム道徳、共同体道徳、ケアの倫理）とどのようにかかわっているのかを明らかにする。「自然の道徳」はもはや複雑な社会においては機能しないという捉え方にたいして、実は、この「自然の道徳」が成立しないと、現代社会における道徳性は育たないのだということを検証する。

その上で第二に、学校で行う道徳教育においては、日常の学級経営、とくに教師と子ども、子ども相互のコミュニケーションスタイルが、重要な意味をもつことを、「共感的理解」、「分かち合い」、「平等性」をキーワードに考察する。その際には、具体的には、継続的に学級文化を観察し、その学級文化と道徳の授業の在り方を比較検討することにより、検証したい。現在のところでは、「異質性の受け止め方」が重要な意味をもつのではないかという仮説をもっている。「管理型」の学級経営をしている学級と「平等型」の学級経営をしている学級の比較研究を行うことにより、上記の仮説を考えていきたい。

また、第三に、「特別な教科 道徳」の可能性と限界について検討する。つまり、上記のキーワードが重要な意味をもつにしても、道徳の授業に過大な期待をもつことは教科の特質を無視することになってしまうので、道徳の授業のなかで、「共感的理解」、「分かち合い」、「平等性」のどのような点を育むことができるのかを、価値項目そして教育方法の視点から明らかにする。全国の道徳教育の先進校の観察及び文献によって明らかにしていきたい。また特に、「特別な教科 道徳」において強調されている「考え、議論する道徳」に焦点をあてたい。上記のキーワードについて考えると、やはり「異質性の受け止め方」が重要だと考える。なぜ他者と見解が異なっているのかを理解し、その場合にどのように和解・調停したらいいのか、といった市民性教育の視点にたって、授業観察を行う。

4. 研究成果

これまでの研究成果として、人間存在において公共性が内在していることを生物学や脳研究、さらには政治哲学や精神医学の成果を援用しながら明らかにしてきた。人間は生物としての弱さをむしろ力として進化してきた動物であり、その際個人の力ではなく共同性を大切にする事で進化してきたことが明らかになった。その意味で人間はコミュニケーションする存在なのであり、道徳性（倫理）の根底として、共同性を維持することを大前提として考えなければならないことが明らかになった。だが実際現代社会においては、人間のもう一方の本質であると思われる自己中心性が強まってきていることも明らかにしてきた。新自由主義社会を支える哲学が強くなってきている。またハンナ・アーレントのアイヒマンに関する思想等に学びながら、現代社会が強い者に対して迎合する傾向についても明らかにしてきた。これらの研究からわかってきたことは、自己に内在する公共性を喚起するためには、共同性を維持するような場を作りだしていくことが必要で、このような場を触媒のようにして道徳性を育てることが可能になるということであった。本年度は、中央教育審議会でも答申として出された居場所としての学校、さらには個別最適な学びと協働的な学びの両立のために、学校において対話の場を形成することの重要性を石牟礼道子の共同体のとらえ方やオープンダイアログにおける対話に学びながら明らかにした。研究成果として、道徳性を育てる際の対話や共同性を支えるキーワードが対等性と異質性（多層性）にあることが明らかになった。

課題は研究の中期がコロナ禍にあり、先進校の実践の考察が十分にできなかったこともあり、具体的な教科道徳の在り方まで検討が進まなかったことである。居場所としての学校とは何かといったレベルでの研究、そのための学級経営の在り方といった研究にとどまってしまった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 生越達	4. 巻 2023
2. 論文標題 教育への「総かり立て体制」の浸食（序説）	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 学ぶと教えるの現象学研究二十	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生越達	4. 巻 1
2. 論文標題 教職大学院で育む実践力（6） 場所としての学級に関する予備的考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 茨城大学教職大学院学校教育実践研究論集	6. 最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生越達	4. 巻 72
2. 論文標題 映画「火垂るの墓」から現代を考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 457-469
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生越達	4. 巻 72
2. 論文標題 他者の死はどこにあるのか 「千の風」の理解にもとづいて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 435-448
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生越達	4. 巻 72
2. 論文標題 授業におけるゆさぶりと教師の存在 授業の生きた経験を考える	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 471-485
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生越達	4. 巻 第6号
2. 論文標題 教職大学院で育む実践力（5）-対話を巡るエッセイ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻（教職大学院）年報	6. 最初と最後の頁 3 - 28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生越達	4. 巻 第71号
2. 論文標題 キャリア教育はどこに向かっていくのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 463 - 480
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生越達	4. 巻 第5号
2. 論文標題 教職大学院で育む実践力（4）- 生命への畏敬から生まれる対話としての教育	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻（教職大学院）年報	6. 最初と最後の頁 3 - 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生越達	4. 巻 第69号
2. 論文標題 近代的自我と共同性 金八先生は時代遅れか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茨城大学教育学部紀要（教育科学）	6. 最初と最後の頁 375 - 393
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 生越達	4. 巻 第4号
2. 論文標題 教職大学院で育む実践力（3）- 授業といじめ予防の共通性-	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 茨城大学大学院教育学研究科教育実践高度化専攻（紀要職大学院）年報	6. 最初と最後の頁 3 - 26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------